

## 丸岡藩騒動記 作造の仇討 第一部

### 作造と太田又八 (1) (No.1~8)

作造が太田又八に出逢ったのは天和2年(1682)の正月3日、場所は丸岡城下の国神神社であった。境内で雪掻きをしている作造に又八が声をかけてきたのである。作造は鳴鹿山鹿村の百姓で農閑期には城下で出稼ぎをする。それでも例年なら年末年始は休み、元旦には家族そろって白米飯と干し鰯、大根と猪肉の煮込み、濁酒で祝うのが常だった。だが昨年今年は暮らしに窮して晦日正月も休みなく働いている。年末は正月準備、晦日の篝火用の薪割り、年が明けると晦日から降り続けている雪の始末に追われていた。

神社に泊まり込んで働いている作造に正月気分があるはずもなく、この三日間も玄米に雑穀を混ぜ込んだ糍飯と根菜と豆の煮物、タクアン、大根の味噌汁だけの粗末な食事で雑用、といっても体力を消耗する力仕事なのだが、黙々とこなしていた。それでも恵まれている方で仕事にあぶれた者は雑穀さえ口にできず飢えながら正月を過ごしていた。

餓えに耐えかねて盗みを働く小盗人、白昼徒党を組み豪農、大商人の家に押し込み、米、雑穀、濁酒などを強奪する無法者もいた。いつもなら犯人は容易に割り出され即座に捕縛されるのだが、最近はこの類の犯罪が多発し役人の手が回らない。それを見こして盗み強奪がさらに横行するという悪循環に陥っていたのである。

貧民が増大し、犯罪が横行した原因は二年続きの大凶作にあった。前々年の延宝八年(1680)に台風が日本を直撃して各地で河川が氾濫、田畑が冠水し農作物が甚大な被害を受けた。台風の被害は越前のみならず全国に及び凶作となり小作農は貧民に転落し困窮、なかには餓死する者もいた。

九年に入ると夏場の旱に苦しんだ。極端な水不足は作物の生育を阻み、加えて巨大台風がまたも日本を襲った。辛うじて育った稲も吹き飛ばされ収穫は激減した。二年続きの凶作は大飢饉を引き起こし、昨年に増して多くの民が餓えた。とりわけ苦しんだのは皮肉にも米の生産者である農民であった。

江戸時代、農民は人口の8割強を占めていた。彼等の生活を支えていたのは

稲作であり、凶作となれば生活の根底が崩れた。収入を他の道に求めようにも受け皿となる働き場はない。入会いりあひの山野さんやで柿、アケビ等の果実、ドングリ、ギンナン、枳たちの実、栗などの木の実、山菜、ヤマイモを採集、猪、狸、兎を捕えて飢えを凌しのいだ。だがそれも晩秋までで、冬になれば降雪が入山を阻み、それすらも手に入らなくなった。

やがて城下を徘徊はいかいする物乞ものごいいが目に付くようになった。彼等のなかには行き倒れとなって路傍ろぼうに屍しかばねを曝さらす者もいた。死を逃れるために盗み、押し込みに走る者もいた。作造も彼等と同じ境遇にあったが、物乞いになることもなく盗みに走ることもなく家族を守っていた。

加賀越前にまたがる加越山系かえつさんけいから越前の平野を流れ日本海に注ぐ九頭竜川くずりゅうがわがある。作造はその九頭竜川の堤防近くに二反余りの田圃たんぼを有していた。もちろん自作地だけで生活はできず小作人として働くという、この辺りでは典型的な小作農民であった。それでも一家は作造、母のヨシ、女房のタエ、長男喜助、長女キクが貧しいながらも肩を寄せ合って生きてきた。

穏やかな生活が一変したのは延宝 8 年の台風で、豪雨によって増水した九頭竜は堤防を越え田圃を泥沼と化した。その年、作造の田圃からの収穫は皆無で小作料も前年の半分以下であった。小作農一家に蓄たくわえがあるわけもなく、来年度の種籾たねもみはもとよりなく、手持ちの食糧で春まで一家を食いつながせることは不可能だった。

作造は大地主でもある庄屋そうやの宗衛門そうゑもんから米を借り、種籾を残して米の大部分を安価な雑穀に変えた。とりあえず飢えからは脱したのだが日々の食事は僅かな玄米に麦、粟、稗ひやう、などの雑穀類、木の実、大根などの野菜を混ぜた糲飯かてめしで、川魚かわうし、田螺蛸たにしじみを添えるという粗末な食事だった。もともと狩りの達人である彼は、山で猪、狸、兎、山鳥を捕えて食することもあったから、恵まれている方であった。

だが災難は容赦なく襲ってきた。悪性の風邪が城下、村々に蔓延まんえんした。ヨシも罹病りびょうした一人で延宝 9 年 2 月、四十八年の生涯を閉じた。遺体は 3 年前に死んだ夫に寄り添うように埋葬された。この年、飢饉に風邪の流行が重なり幼子、年寄りの死がいつもの年に倍して多かった。

春になり作造、タエは田植えで多忙を極めた。自作地を早々に済ませ、夜明

けから日の落ちるまで庄屋から小作を引受けて働いた。だが梅雨の季節に雨は降らず夏の酷暑で大地は干上がった。旱魃の被害は深刻で作物は枯れ、僅かに育った稲も二年続きの台風の直撃で吹き飛ばされ収穫は激減した。

延宝年間には8年、9年の台風被害だけではなく、5年に十勝沖地震、房総沖地震、6年には宮城北部沖地震が発生している。相次ぐ災害に元号は9年9月29日（1681年11月9日）、改元されて天和となった。

天和元年の師走は前年に増して悲惨であった。物乞いが巷に溢れ、餓死者が続出した。事態の深刻さに藩も動きを見せた。貧民への施米をおこなったが、藩財政も年貢の減少で悪化しており、焼け石に水の状態だった。

作造一家も困窮した。昨年の飢饉は借米で切り抜けたが、凶作で返済が滞った今年には追加の借米は断られた。それでも二反の田圃を形に米を借りた。

むろん作造は田圃を手放すつもりはない。そのためには必死に働き来年の収穫で返済しなければならない。できなければ田圃は取り上げられる。餓えても種粃には手を付けず、玄米の姿さえ見えぬほどの糲飯を常食としながら来年の収穫に望みを繋いだ。だが師走に入ると雑穀すらも尽きはじめた。山で猪を捕え捌いて肉とし、雑米を切り薪とし、町家に売り歩き、そのかたわら土木、大工、荷役等の力仕事を引き受けて銭、米を得て糧としていた。彼は仕事を選ばず、骨身を惜しまず働いたから依頼主の評判もよく仕事が途切れることはなく、仲間に仕事を回していた。

それでも路上に放置されていた死体の埋葬は断った。死因は餓死ではなく疫病との噂が流布しており、協力してくれる仲間がいなかったからである。身元不明人の死体は人里離れた山間の無縁墓地に埋葬されるのだが、その仕事は賤民が担っていた。だが疫病の噂が広まると（実際は流行性の風邪なのだが）、伝染を恐れて彼等は仕事を拒んだ。困った役人が死体の埋葬を作造に依頼してきたのである。作造も断り、誰からも見放された死体はいつそう無残な姿を曝し続けていた。このままでは正月を迎えられない、死体を川に流そうという声が町方衆からあがった。

いったんは断ったものの路傍の仏が哀れでならぬ。無残な姿に心を痛めた作造は仲間を説得し埋葬の仕事を請け負った。彼等は仏を丁重に扱い、埋葬を終えると手を合わせて成仏を願った。仏は我が身だったかも知れないのだ

丸岡藩家老、太田又八は作造の行為を浄土宗本光院月窓寺住職、寂誉から聞かされた。

本光院は本多家の菩提寺で本多重次（作左衛門。成重の父）、成重（本多丸岡藩初代藩主）、重能（2代藩主）、重昭（3代藩主）が祀られている。又八は重次以下、歴代藩主の命日と師走29日と正月3日に墓参りをする。その後、寂誉から茶菓の接待を受け雑談を交わす。この雑談が又八に城下の貴重な情報をもたらした。

寂誉は頼まれれば町屋にも出かけて御経をあげる。気さくな人柄で、心を許した主人や女房は城下の出来事を具に話した。

「一本田の地主、藤右衛門が苗字帯刀を許されたそうですが、城中のお偉方に米2百俵献上したという噂があります」という話から、

「吉屋の旦那が妾を囲いました。その妾というのが50俵(20石)取りの下士の娘だそうです。お金で買われたのでしょうか、こうなると百姓もお侍もないですな」

「三国湊には商人、船頭相手の遊郭が上新町（福井藩領）界隈で軒を連ねて賑わっていたのですが、近頃は新参の滝谷出村（丸岡藩領）の遊郭が勢いを増し、上新町を凌ぐ繁盛ぶりで、楼主の間では店をこちらに移そうという話がもちあがっているそうです」

「橘屋さんに盗人が入りまして、それが不思議なことに金目のものにはいっさい手を触れず、米5升だけを盗んだそうです」

「大店の野村屋さんが押しこみに遭いました。夜明け前のことで賊は10人足らずでしたが奉公人は住込みの者、それも大半が女中とあって抗うことはしなかったそうです。幸い怪我人もなく店が壊されることもなかったのですが、蔵にあった米10俵、豆1俵、味噌1樽、酒2樽が荷車に積まれて持ち去られました。言葉訛りから加賀者、おそらく山竹田辺りの国境から入りこんで来たのでしょう。役人が駆けつけた時には加賀領に逃げ込んで、手も足も出せません。まあ、加賀の国でも越前者が同じようなことをしているのしょうから、おあいこですな。案外、双方が示し合わせて企みを練っているのかも知れません」

寂誉は町で耳にしたこと、感じたことを話す。政まつりごとに関わることであっても口を閉ざさない。

「重益しげますさまは暗愚あんぐな殿さまで、政の是非をわきまえず日夜酒食しゅうじきに耽たふっている。そのような他愛たわいもない流言飛語りゅうごんひごが広がっております。噂の出所は家臣らしいのです。よりによって家臣の口から殿の悪口雑言とは・・・嘆なげかわしい限りです」

「城下に浮浪者が溢あふれています。土地を手放した百姓衆で今は物乞ものごいで生きていますが、そのうち見切りをつけて他国に逃散にげさんする者も大勢出てくるのではないかと恐れながら杞憂きゆうしております」

寂誉の話をも又八は黙って聞くだけだが忸怩じくじくたる思いである。彼は家老の要職にある。だが名前から推察されるように名門の出ではない。父は70人扶持しちじゅうにんさつち(126石相当)の家臣であった。上士じょうし(上級武士)とまではいかない。

※1人扶持として支給される米は1日5合、年にして18斗(1.8石)。

父の跡を継いだ又八は利発者で先代藩主、重昭に見込まれ近習きんじゆに抜擢された。次第に頭角を現し側近となり、重益の治世になると家老に抜擢された。彼が昇進を重ねた経緯いきさつ、政敵・本多織部との争いについては後述するとして、とりあえず寂誉の話が続きたい。

「師走に入って路上死が目に付くようになりました。浮浪者たちの成れの果てです。物乞いで幾ばくかの食べ物は何れでも得られるでしょうが嚴寒げんぱんに老人や病人が路上生活することは無謀むぼうです。凍死する者、衰弱して物乞いすら出来ず餓死する者もおります。悲惨なことです」

寂誉の言葉は鋭い矢となって又八の胸むねを貫く。

彼は無言のままである。

(殿の噂は事実、流言飛語りゅうごんひごの類ではない。のみならず家臣は殿に不満を抱いている。それも無理はない。借上げと称して家臣の俸禄ほうろくの一部を返上させ、酒色しゅしよくに溺れ贅ぜいに耽たふっておれば批判を口にするのも当然であろう)

又八は苦悩する。殿の乱行は家老である又八の責任であるが、彼にしても打つ手が無いのだ。

己が享樂きやうらくの他には興味を示さず欲望おもむの趣くままに行動する、まるで幼児のような重益公である。家臣を犠牲にして己が享樂にのみ心を奪われるようでは皆の心は離れ、家中が乱れる。家臣だけではない、凶作で苦しんでいる民百姓から怨嗟えんさの声も起きようと、理を尽くして幾度となく諫めても馬耳東風である。この頃は又八を遠ざけ、甘言を弄する本多織部の傀儡かいらいとなっている。

織部は代々家老職を輩出した名門の出である。先代・重昭の治世ちせいでも家老職を務めていたが、重昭は織部の狡猾こうかくさを嫌い遠ざけていた。重昭が重用したのは老臣・本多十郎左エ門であった。十郎左エ門は謹嚴実直きんげんじつちよくな人物で重昭をよく補佐した。延宝4年(1676)重昭が死去し嫡男・重益(14歳)が藩主の座に就くと、十郎左エ門は若年の藩主の後見役となった。

彼はいっそう硬骨漢となり重益を諫め、ときに叱責した。家中にも睨みにらみをきかせ、家臣の(本多織部をさすのだが)勝手な行動を許さなかった。

だが病に倒れた。死期を悟った十郎左エ門は嫡男・刑部と太田又八を枕元に呼んだ。

太田家は代々勘定方役を務めていたのだが、又八の有能さと豪胆、且つ誠実な人柄が重昭に認められ側近となった。重昭が死去し、重益が藩主となると、十郎左エ門は彼に勘定頭かんじょうがしらを命じ、藩財政の再建を託した。彼は期待に応え、財政改革を断行、再建を果たしたから、十郎左エ門はむろんのこと家中の信頼を得た。

次の執政者と自認している本多織部にとって目障りな存在である。いずれ敵対勢力の旗頭になるであろうと、敵愾心を燃やしていた。又八は財政改革だけではなく、藩政改革も目指していたから、織部は反対する守旧派を糾合し、悉ことごとく又八と対立した。藩内は又八を支持する改革派と、織部を支持する守旧派とに分かれていった。

十郎左エ門が病に伏せると、後事を又八に託したから、彼が丸岡藩の実質的な執政者となった。又八は守旧派の存在を意に介せず、藩政改革を断行、次第に権力を掌握、その人柄もあって、心酔する者も現れてきた。

十郎左エ門は二人に丸岡藩獅子身中の虫である本多織部を排除せよとの遺言を残し死去した。藩主、重益には太田又八を家老に推挙し、その言は我が言として尊重すべきと、遺言した。

太田又八は家老に登用された。だが、十郎左エ門死去後、本多織部は暗愚な重益に酒色の味を覚えさせ、歡心を得ることに成功、一派は復権した。一方、又八は刑部とともに織部に反感を抱く家臣を結集した。丸岡藩は本多織部の守旧派と太田又八が率いる改革派の対立が水面下で静かに進行していた。

藩内は改革派が多数を占めた。だが藩主・重益を傀儡とした織部に迂闊に手を出せない。ならば一派の悪事を暴きひとりひとり失脚させ、織部を孤立させた上で一気に勝負に出る。それが又八たちの策であった。

(いずれ殿は織部に唆され儂を排除する動きに出る。その前に織部を排除せねばならぬ。だが、それだけで事は収まるのか・・・) 又八は悩む。

(殿を傀儡とするために酒色に溺れさせた織部が諸悪の根源、獅子身中の虫と断じたが、酒色好みは殿の持って生まれた性癖。性癖を抑える自制心が欠如しているのは暗愚ゆえ。暗愚さが容易に奸臣を呼び込む。今織部を排除しても、再び奸臣が現れるだろう。とすれば諸悪の根源は織部ではなく殿、重益公そのものではないか)

(さすれば織部を排除した後、殿に隠居を迫る) 又八の秘めたる決意である。彼はゆっくりと茶をすすった。

「暗い世相ではありますが、士もおりますな。もっとも身分は百姓ですが」寂誉が言う。

「ほう、どのような御仁ですか」始めて又八が口を開いた。

「浮浪者のなかに路上死する者がいることは先に述べた通りですが、その死骸が放置されたままでした。一昨年から悪い病が流行っており、路上死はその病が原因との噂がたちまして誰も近づこうとしないのです。正月を控えて不吉この上もないと皆が案ずるのですがどうしようもありません。仕方がなかろうと川に流すことにしたのですが、そのとき鳴鹿山鹿村の作造という男が埋葬を引き受けたのです。彼の者が申すには、

『路上死した者も貧農、我も貧農。とても他人事とは思えません。さぞかし現世

では悲惨な暮らしを送っていたでしょう。死ねば皆仏との教えがございしますが  
仏になっても犬畜生の如く川に流されては成仏できません。せめて埋葬して弔  
いたいと思います』

あっぱれな心根でございませぬ。むろん異存のありようがございませぬ。作造  
という男、仲間 3 人を説得して共に仏を埋葬したのでございませぬ。  
心根もそうですが、胆力といい、誰もが尻込みする仕事を、作造の頼みならと  
引き受けさせる人徳といい、見事なものでございませぬ。あれほどの人物家中で  
もそうはおりますまい」

「その男に逢ってみたい。鳴鹿山鹿村の百姓と聞いたが訪ねてみるか」

「その必要はございませぬ。作造は今、国神神社で下働きをしております。年  
の頃は 25、6、の屈強な男でございませぬから直ぐにおわかりになります」寂誉が  
言った。

太田又八は寂誉に礼を述べ、その足で国神神社に向かった。又八が作造に声  
をかけたのはそのような経緯からであった。